

4. 鼻アレルギーに対するヒスタグロビン・ネビュライザー療法の臨床的検討

米川絃子、北野康雄、小池靖夫、太田文彦（近畿大）

昭和55年2月6日から7月25日までの約6ヶ月間に、当科を受診した鼻アレルギー患者18名について、ヒスタグロビン・ネビュライザー療法を試み、その投与量及び投与方法を臨床的に検討した。年齢は15才から46才までにわたり、30代が最も多く主婦層で占められていた。重症度別では、中等症以上が16例で、病型は、I型つまり、くしゃみ、鼻汁型が13例であった。罹病期間は、5年未満が最も多く13例であった。鼻副鼻腔以外のアレルギー性の合併は6例で、本人及び家族のアトピー性疾患の既往が有るものが11例であった。鼻アレルギーに対する既往の治療は、12例に期間は種々であるが、何らかの治療の経験があった。

投与方法は、ヒスタグロビン 1 vial を、生理食塩水 3 ml で溶解し、次の2つの群に分けて使用した。A群(9例)を1回 $\frac{1}{2}$ vial群とし、週3回 \times 8週間、合計24回投与、B群(9例)を1回 $\frac{1}{2}$ vial群とし、週2回 \times 6週間、合計12回投与とした。原則として、両群共に、総量 6 vial を目標にした。治療効果判定として、症状別効果は、鼻症状及び鼻腔所見について、治療前と後と比較して行った。総合効果判定は、鼻アレルギー日記、諸検査成績（ハウスダスト皮内反応、鼻汁中好酸球、血中好酸球、血清 IgE 値、ヒスタミン固定能、副鼻腔 X 線検査）、副作用の有無を考慮に入れ、鼻症状の改善度により判定した。

結果は、次の通りである。鼻症状の変動(図1)については、くしゃみ発作は、A群6例、B群4例、鼻汁は、A群8例、B群5例、鼻閉は、A群8例、B群6例に改善がみられ、両群共、鼻閉の改善が著明で、特にA群において、鼻閉、鼻汁の改善がB群より優れているように思われる。又、両群に、嗅覚異常、生活の支障度の改善がみられ、A群においてすぐれているようである。鼻腔所見の変動(図2)は、A群において、鼻汁分泌量の減少傾向をみる外、両群共、変動は少い傾向を示している。検査成績の変動は、皮内反応、血中好酸球については、両群共、明らかな傾向を示しておらず、鼻汁中好酸球については、A群において、減少傾向がみられた。血清 IgE 値は、A群において、治療前後共に、正常範囲で、変動は少く、B群においては、3例が高値を示し、いずれも治療後に低下傾向を示した。ヒスタミン固定能の変動は、A群では4例、B群では6例に、上昇傾向がみられた。X線検査では、軽度ではあるが副鼻腔に異常陰影を認めたものが8例で、いずれも治療終了時の検査から、特に変動はみられなかった。副作用は、特に、鼻内の刺激感、不快感について、チェックしたが、全例において認められなかった。

図1 鼻症状の変動

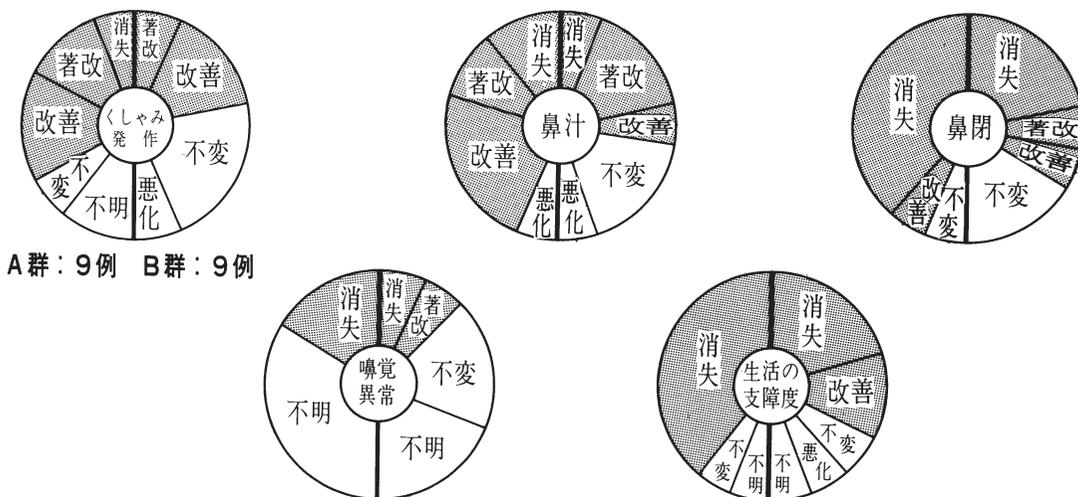
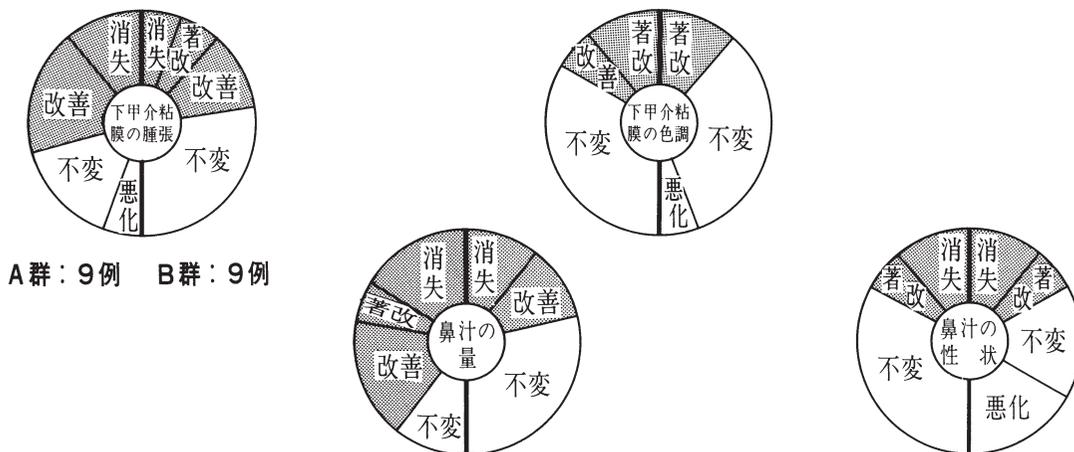


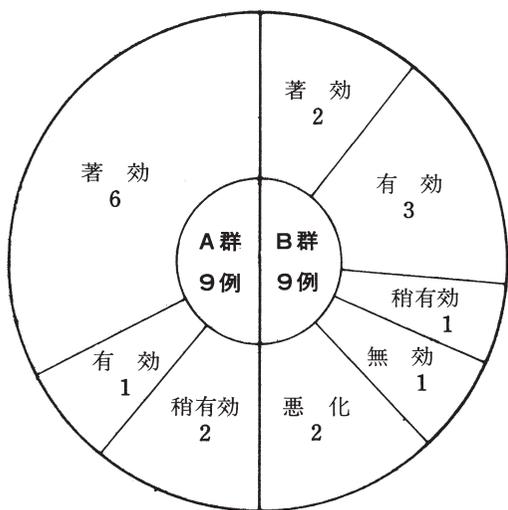
図 2 鼻腔所見の変動



総合的治療効果判定は、次のとおりである。A群では、著効6例、有効1例、稍有効2例と、全例に効果があり、しかも、治療開始より第2週から効果がみられた。B群では、著効2例、有効3例、稍有効1例、無効1例、悪化2例であり、6例に効果がみられた。治療効果発現の時期は、A群に比べて遅い傾向を示した。

以上の成績から、鼻アレルギーに対するヒスタグロビン・ネブユライザー療法は、有用であり、その投与量び投与法は、1回分の使用量が少量でも、回数が密なほど、治療効果が高いと考えられる。又、本症例の治療効果の持続或いは、症状の再燃、増悪については、今後の追跡調査が必要と思う。

総合効果判定



効果発現の時期

	2週	3週	4週	5週	6週	7週	8週	～	計
A群	4	2	2	1					9
B群			1	2	2		1	3	9
計	4	2	3	3	2		1	3	18